

2024年4月 28日 久宝教会 復活節第5主日礼拝メッセージ

「霊と肉、理性と本能」

水谷憲牧師

聖書 ガラテヤの信徒への手紙 5章16-26節

本日は「ガラテヤの信徒への手紙」を共にお読みしました。「ガラテヤ」というのは、都市の名前ではなく地域の名前で、今で言うトルコの中央部にあたります。この手紙は、パウロがそのガラテヤ地方の諸教会の信徒にあてて書いた手紙であるわけです。パウロがこの手紙を送ったこのガラテヤの信徒たちというのは、パウロの教えに反して、「救われるためには信仰だけではだめだ。ユダヤ人と同じように律法を守り、割礼を受けることが必要だ」と主張する者によって、すっかり惑わされていた人々でした。つまり、パウロは「割礼などなくともイエス・キリストに結ばれてさえいれば、ユダヤ人でなくとも救いに与れるのだ」と言っていたのに、パウロがいなくなった途端に、そのパウロに反感を持つ者たちが、「いやそうじゃないんだ。救われるためには律法を守って、割礼を受けて、ユダヤ人のようにならなければならないのだ」と主張し始めていたわけです。それについてパウロは1:6-9において、次のように怒りをあらわにしています。「キリストの恵みへ招いて下さった方から、あなた方がこんなにも早く離れて、他の福音に乗り換えようとしていることに、私は呆れ果てています。他の福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなた方を惑わし、キリストの福音を覆そうとしているに過ぎないのです。しかし、たとえ私たち自身であれ、天使であれ、私たちがあなた方に告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。私たちが前もって言っておいたように、今また、私は繰り返して言います。あなた方が受け入れたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。」

このようにこの手紙は、反対者に惑わされ、さらにはお互いにかみ合いをも起こしたりしているガラテヤの人たちにパウロが、「お前たちは一体何を聞いたんか」と、「もう一回説明するけどもやな」といった具合に、ところどころ怒りを隠しきれないままに書いたものでありました。「わしらが教えたことと逆のことを教えようとするような奴は、それがたとえ天使だったとしても呪われてしまえ」と。「そんな

こと言っているん？」と思いますけど、めちゃくちゃ怒っていますね。

そして本日の箇所になるわけですが、この文脈としては、あなた方は洗礼を受けて神様に召されたことによって、律法という奴隷の鎖からの自由を与えられた人たちなんだから、その与えられた自由を、自分の好き勝手に任せるのではなくて、霊の導きに従った自由としなさいというものです。そして、「避けるべき肉の業」を挙げ、このようなことを行う者は神の国を受け継ぐことなんてできない、さらに「霊の結ぶ実」についても説明し、霊に導かれて歩む中でこのような実を結ぶことができるならば、そもそもそこに律法など必要ないのだというわけです。

しかし私には、これがまたパウロによる新しい律法になってしまう可能性もあるのではないかという心配もあります。つまり、たとえばここで「肉の業」とは「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ（他人の長所や幸せを見て、自分にはそれが得られないことを不満に思い、相手に悪いことが起こればいいのと思う気持ち）、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他この類のもの」とされています。そして、「霊の結ぶ実」とは、「愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」であるとされています。しかし私たちは、ここでパウロが本当に言いたかったことは何か、つまり、これら肉の業に挙げられた事柄に共通するものは何か、霊の結ぶ実とされている事柄に共通するものは何かを考えることなしに、ただ機械的にこれらのことだけを避け、またこれらのことだけを実行できればよいとしてしまっただけではいけないのだらうと思うわけです。

パウロの言う「肉の業」、それは、神と人、人と人との関係を破壊する行為、存在を切り捨てる行為、人の尊厳を踏みにじり、人を傷つける行為のことを言っているのではないのか。反対に、「霊の結ぶ実」というのは、神と人、人と人との関係を回復し、つなぎとめ、人をかけがえのない存在として大切にしていける行為を意味しているのではないのか。本田哲郎というカトリックの神父さんは、22 節を「霊の結ぶ実」は、「人を大切にすることと喜びと平和であり、寛大な心、いたわり、思いやりを持ち、信頼して歩みを起こし、痛みを知る優しさをもって、自主自立で生きることです。こういう人たちに対して、律法は無力です」と訳されています。この 22 節と比

べるならば、19 節の肉の業として挙げられている事柄はいずれも、すべてのいのちをよしとされる神様の愛などとはかけ離れ、自分たちと異なる誰かの尊厳を踏みにじって楽しんだり、切り捨てて安心したりするような、自分のことだけしか考えられていないようなものであるわけです。そんな自分たちだけのまやかしの安心・平和はパウロの勧める平和ではない。イエス・キリストは「私は、地上に平和をもたらすために来たのではない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ」と言っていました。「火を投ずるためだ」とも言っていました。イエスが剣をもって、あるいは火を投じて壊そうとした地上の平和も、そのようなまやかしの平和、「最大多数の最大幸福」からこぼれ落ちた者については関知しないという平和であったわけですから、イエスが壊そうとしたそんなまやかしの平和とパウロの勧める平和が同じであるはずはないし、そんなまやかしの平和に対する怒りと、パウロがここで肉の業として禁じる怒りとは同じものであるはずがない。イエス・キリストは、商売の家と化していた神殿をひっくり返し、商人を追い出しました。安息日に手のなえた人を会堂の隅に追いやったまま、イエスがいやされるのを黙って見ていた人々に対して怒りました。そのような不義にたいする怒りまで、パウロの言う肉の業と同じものにされるべきではないのです。

私たちはクリスチャンと言うと、いかにも清く正しく穏やかで、いつもにこにこして、質素で控えめに生きる人々、理性的な人々のようなイメージがあるわけです。もちろんそれが悪いわけではないのですが、見えないところで痛い思いをしている人にこそ目を留めたイエスの視点を持つことなしに、私は救われました、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまいましたなどと簡単に言って、漠然としたまやかしの平和を喜び、それに対する怒りまでも肉の業として禁じるようなクリスチャンではないように、私たちはいつもイエスの姿を思い浮かべ、イエスならどうされただろうかと想像しながら、肉の業と霊の結ぶ実とを注意深く吟味しながら日々を過ごしていかなければならないように思います。

まあそれでも実際そんなことできるのかという話でもありますが、人間は、これまで理性によって本能を乗り越えながら進歩して来ました。例えば動物は、火を怖

がる本能のために、火を使うことは出来ません。しかし人間は、理性によって火を怖がる本能を乗り越え、火を使いこなせるようになった。人間は、自己の本能的な欲求を理性によって抑制することで、他の動物にはとうていできない進歩と発展を実現しました。このことが示すように、人間の理性は本能を乗り越えることができるわけです。そしてこのことは、自分の命を守ろうとする本能を乗り越えて自分の命を危険にさらし、隣人愛や人類愛を貫き通した、世界中の多くの人達によっても既に証明されているところです。もちろん、それは誰でもできることではありません。しかし人間の理性は、自己の生存本能をも凌駕することが実際にあるわけです。それこそが、まさに「霊の導き」による力なのかもしれません。理性が本能を乗り越えることができるように、数々の肉の業、すなわち神と人とを断ち切り、人と人とを断ち切り、自分を立てるため他者のいのちの尊厳を踏みにじるような肉の業を避けることは、キリストの導き、霊の導きによって必ず可能となると信じます。願わくは、私たちがキリストの導きによって肉の業と霊の結ぶ実とを正しく見分ける目と、感性をもつことができますように。